



LOHAS CLUB REPORT

【第1回配信】

レポート No.002

<2005/12/5 第1回ロハスクラブ トークセッション内容梗概>

「最後の晚餐」

－ 米国産牛肉輸入再開とロハス －

ロハスクラブ理事: 福岡伸一(分子生物学者)¹

米国産牛肉の輸入再開が現実日程となってきた。しかし、この政策決定に至るプロセスにはあまりに問題が多い。

第一に、国内の狂牛病全頭検査があえて緩和された。国内には狂牛病感染牛が発見されつづけ、一方、感染源はなお特定されていない。つまり国内には狂牛病対策を見直す合理的状況変化はない。

第二に、米国の狂牛病汚染状況やそれに対する実効的な対策が不十分であるにも関わらず、遵守の程度がわからない月齢基準と特定危険部位の除去が適正に行われるとの前提を仮定することによって、輸入再開に道を開いた。このままだとリスクの程度が不明の牛肉が国内に流入するおそれがある。

第三に、政府は最終的な判断は、消費者の選択にゆだねられるとした。これは行政の責任転嫁である。なぜなら、選択の自由の前提となる表示の義務は、外食、給食、加工品などにはないからである。

第四に、これがもっとも重要な点だが、食の安全という国民の生活にとってもっとも重要な問題の決定プロセスに消費者の声が全く反映されていない。

以上の問題点について政府の不十分な対応姿勢に抗議するため、私たちはここに、国内で安心して牛を食べられる「最後の晚餐」をとりおこなうものである。

一方、ロハスクラブ独自の現地調査では、米国内にも、飼育法や飼料を管理して、オーガニックビーフやナチュラルビーフを供給している業者も存在していることがわかった。今回の施策は、米国産牛肉のうちこのような製品を選択的に購買したい消費者の選択を制限するものでもある。

¹理事プロフィール: 福岡伸一(ふくおか・しんいち)

1959年東京生まれ。京都大学卒。米国ロックフェラー大学およびハーバード大学医学部博士研究員、京都大学助教授を経て、青山学院大学理工学部にて新設された化学・生命科学科教授。分子生物学専攻。専門分野で論文を発表するか

たわら一般向け著作・翻訳も手がける。近作に、狂牛病禍が問いかけた諸問題について論じた文春新書「もう牛を食べても安心か」(文藝春秋)、Y染色体の由来と未来を展望した翻訳書「Yの真実 危うい男たちの進化論」(化学同人)、史上最もエキセントリックなノーベル賞受賞学者の自伝「マリス博士の奇想天外な人生」(ハヤカワ文庫)、ドーキンスの「虹の解体」(早川書房)などがある。